

チャグチャグ馬コの由来

みちのく岩手に初夏のさわやかな風が伝わる季節、チャグチャグと鈴の音も軽やかに色とりどりの装束をつけた60頭近くの馬コが馬の氏神をまつた滝沢市の「鬼越蒼前神社」に集まってきます。そして参拝をすませた後、盛岡市中心部にある盛岡八幡宮まで約14キロの道のりを約4時間かけて行進します。道中、岩手山を背景に、馬に着けられた大小の鈴から流れるチャグチャグという勇ましくもあり、にぎやかに鳴りびびく音色から、この行事「チャグチャグ馬コ」の名が生まれました。

では、どうして馬と人間がこのような深くかわり合うようになったのでしょうか。チャグチャグ馬コの歴史を振り返ってみましょう。東北地方北部に馬が導入された奈良時代以降、全国有数の馬産地として名を馳せるなど、岩手県を語る上で「馬」は切っても切り離せない存在です。16世紀後半に馬耕の技術が入ってくると、人と馬が一つ屋根の下で暮らすこの地域独特の形をした民家「南部曲り家」が生まれ、馬を家族の一員として大切に作る気持ちを一層強めていきました。

こうして培われてきた愛馬精神から、岩手県内では「馬」にちなんだ端午の節句に、農耕に疲れた愛馬を癒やし、無病息災を祈って馬の守り神である

「蒼前神社」や「駒形神社」をお参りする風習「オソデマイリ（お蒼前参り）」が生まれました。このお蒼前参りの際に、小荷駄装束を着せた馬を引くのが流行し、チャグチャグ馬コの原型が芽生えたと言われていいます。

1930年に馬好きで知られる秩父宮殿下がご来県された際に、蒼前神社参詣後列を成して盛岡八幡宮の神前馬場で馬ぞろいをお見せしたところ大変な評判となったため、翌年からもお参りの後に盛岡八幡宮まで行進し、開催するのが恒例となりました。

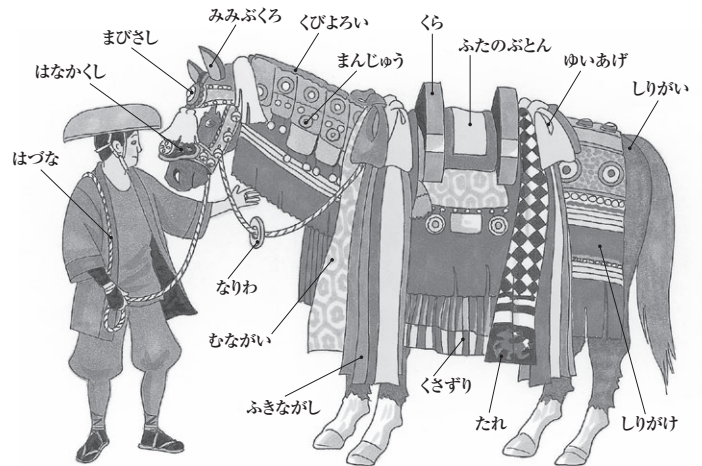
1948年に「チャグチャグ馬コ保存会」が結成されると、パレードへのさまざまな工夫が施されるようになり、チャグチャグ馬コの行進は年を追って華やかなイベントへ変化を遂げていきました。1958年には田植えの最盛期と重なる旧暦の5月5日から、晴れの特異日として知られる新暦の6月15日に開催日を変更し、初夏を彩る風物詩として全国的に知られるようになりました。また、1978年に文化庁から「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されています。2001年からは、より多くの馬が参加でき、多くの人が観覧できるよう開催日を6月第2土曜日に変更しています。

チャグチャグ馬コの装い

チャグチャグ馬コの最大の魅力は、馬コが着る色鮮やかな装束と装束の至る所に着けられた大小の鈴が奏でる「チャグチャグ」の協和音です。この鈴の音は、1996年に「残したい日本の音風景100選」に選定されています。宮沢賢治は盛岡の下の橋で見た馬コの光景を短歌に詠んだとき「ちゃんがちゃんがうまこ」や「ちががちががうまこ」などと躍動感あふれる表現をしています。

祭り当日は、早朝から家族総出で馬具や装束の取り付けが始まります。その順序には一定のしきたりがあります。最初に鞍を着けて二布ぶとんをかけ、結び上げて腹部を包みこみます。続いて真鍮製の鳴輪、むながい、しりがい、首よらい、まびさし、鼻かくし、耳袋と進みます。はづな、おもがいなども取り付けられ、最後に吹き流しと呼ぶ垂れ布をさげます。大小の鈴の数は1頭あたり700個以上とも言われています。首よらいなどに見られる花模様の「まんじゅう」と呼ばれる飾りは、古式防具の名残をとどめていると言われています。

装束の配色はそれぞれの家で趣向が凝らされ、昔ながらに家族の手で丹精こめて仕上げられます。チャグチャグ馬コは手作りの祭りでもあるのです。



パレードマップと予定時間

- 集合時間／午前8時30分
- 場 所／滝沢市鬼越蒼前神社

